29

ヨハンニティウス（フナイン・イブン・イスハク）の「ガレノスの小治療学入門」における non-naturals の概念

平尾　真智子

ガレニズムにおける衛生思想である non-naturals の概念は Seidler, E. (Geschichte der pflege des krenken Menschen. 1980) や川喜田愛郎（「病気」、一九八〇）によると看護に関係のある思想とされている。この non-naturals の用語は naturals, contra naturals の用語とともに、中世のガレノス医学の書物に用いられている。シュミットによるとこれらの用語が用いられている医学書はガレノスの『医術』、ヨハンニティウスの『ガレノスの小治療学入門』、ラージー『アル・マンスルの書』、アリ・アッバス『王者の書』、アヴィセンナ『医学典範』の五つである（Lexikon des Mittelalters, 7Bd, 1995 より res naturales の項目）。

このなかで中世ヨーロッパの大学でガレノスの医学を学ぶための入門書として多く活用されたのがヨハンニティウス（アラビアではフナイン・イブン・イスハク、809-873）の『ガレノスの小治療学入門』である。一九九四年の第九五回日本医史学会で、E. T. Withington によるこの本の英訳文についてはすでに報告した（「中世ヨーロッパの衛生思想 six non naturals」）が、今回は non-naturals に関する部分が異なる H. P. Cholmeley による英訳文の Isagoge について報告する。

ヨハンニティウスはラテン名で、イラク出身のキリスト教徒の医師であり、ギリシアの医学を体系的にイスラム世界に紹介した最大の功労者とされている。彼は数人のカリフの侍医になったが、同時に翻訳者および文筆家でもあった。フナインは息子イサクおよび甥のフバイッシュとともにバグダッドでガレノスの作品計一二九を注文に応じてアラビア語またはシリア語に翻訳した。九世紀にはバグダッド、カイロ、ダマスカスに医師養成用の三大教育機関があり、医学生向けの教科書が存在した。フナインはガレノスの体液生理学および体液病理学（いわゆる四体液説）を自著『ガレノスの小治療学入門』のな

かでまとめた。この小冊子は一一世紀に南イタリアのコンスタンチヌス・アフリカヌス（1014～1087）により“Isogoge in artem parvam Galieni”のタイトルで翻訳された。この本はベネチア、モンペリエ、ボローニャ、パトバおよびナポリで使用された〝アルティセラArticella〟（言葉の意味は簡易治療術）、すなわち最初のスコラ学医術教科書に必須講読作品として入っている。

H. P. Cholmeleyによる英訳文のIsagogeは、“A Sourse Book in Medieval Science, Cambridge, Mass., 1974”の七〇五―七一五ページに収録されているものである。この本の主な内容は、理論はnaturals（基本物質、体液、器管、力、精神）を伴う健康、cotra naturals（病状、病因および随伴症状）を伴う病気、および第三のグループとして中立がある。実践には物質としての薬剤（浸剤、煎じ薬およびそれらの製法）、non-naturals（空気、飲食、運動と休息、睡眠と覚醒、排泄と充満、情緒）を伴う養生法、および第三の存在である外科学がある、というものである。

E. T. WithingtonによるIsagogeの英訳とH. P. Cholmeleyによる英訳が異なるのはnon-naturalsに関する部分で、前者では表題自体がsix non-naturalsとなっており、内容は一・空気、二・運動、休息、入浴、三・食物と飲物、四・睡眠と覚醒、五・性生活、六・精神の病気、と番号が明記され六つとなっているが、後者ではnon-naturalsの表題で、空気、季節、風、土地、運動、休息、食べ物、飲物、睡眠、性生活、心の病気、の小項目となっており、番号は記されておらず、十一項目があげられている。これは翻訳の底本としている写本自体の相違と考えられるが、中世にはnon-naturalsとsix non-naturalsの用語が混在して用いられて、固定した概念ではなかったことがわかる。

（山梨県立看護大学）